

古典インドに於ける呪詛と懐胎

森 真 理 子

はじめに インドの物語世界では、結婚後の女性の不妊／懐胎問題が一つの重要なモチーフを形成する。その多くの場合、聖仙 ṛṣi などの関与を伴っているという事実に注目し、さらにインド古典医学文献 Cs などに蓄積された「懐胎のメカニズム」と照らし合わせた上で、不妊／懐胎問題への聖仙の贈物／呪詛による関与を文献の用例に即して検証し、その意味を考察することが本稿の目的である。

1. 懐胎のメカニズム・懐胎の条件 古典インドにあって、女性の胎児処 garbha-āsaya に於ける①男性的種子 śukra と②女性的種子 śoṇita の結合体に、第3の外的な要因③ ātman ないし jīva が降下入した結果、胎児 garbha が成立すると考えられていたことが、以下の Cs の (1) などから明らかになる。健全な śukra, 健全な śoṇita, 及び健全な garbha-āsaya への ātman/jīva の降下入が、いわば懐胎の為の必須な三条件である点を先ずは確認すべきである。そして聖仙の贈物／呪詛が介入し得るのは、当事者たちの営為に帰される①②に対して、当事者たちには儘ならぬ③第3の要因 ātman/jīva の降下入に関してであろう。

(1) 損なわれざる retas [= śukra] を持てる男と、害されざる yoni・śoṇita・胎児処を持てる女との、受胎可能期 (ṛtu-kāla) における、創合 (saṃsarga) がある時に、しかも、その両者の、作法に適った創合がある時に、胎児処内部に到れる śukra・śoṇita の創合体に jīva が降下入する。sattva との結合があることから、その時に胎児 (garbha) が生じる。(Cs IV.3.3)

2. 聖仙の満悦と怒り～子宝と不妊 以下の R の (2) (3) からは、聖仙の喜び supṛita によって子宝が授かり、怒り krodha/manyu に基づく呪詛 śāpa によって不妊 anapatya/apraja が出来することを改めて確認することが出来る。

(2) 昔スケートゥという名前の勇猛な大夜叉がいました。そして彼は立派な素行 (śubha-ācāra) の持ち主ではありましたが、子どもがなく (anapatya), 大苦行を敢行しました。一方その時、ブラフマー神はその夜叉の長に対して大いに喜び (supṛita), タータカーという名前の、宝のような娘を授けました。(R I.25.5-6:p.53)

(3) その時、ラーマよ、山の娘は神々に向かって次のことを語り、怒り (krodha) で目を赤くして激昂して (samanyu), 一切に対して呪詛しました (asapat). 「[わたしには、] 息子を欲しての和合 (samgatā) は、禁じられているのだから、[汝らは、] 自身の妻たちに於いて、子どもを設けることが出来ない。汝らの妻たちは今日より以降子なし (aprajā) となるべし。」 (R I.36.20cd-22 : p.69)

この (2) (3) は、聖仙の好悪による贈物 (子宝) と呪詛 (不妊) の実質が、懐胎の為の第3条件の促進と妨害であると理解すべきであることを指示している。なお促進と言っても、以下の (4) (5) に見られる「男子を懐妊するための呪文」を行使する場合の妨害の駆除と、(6) (7) に見られる促進の活性化の二タイプのあることが理解される。前者の最古の資料を提供する Av の (5) の呪文／真言 mantra そのものの中に、既に懐妊に対する古典期インド人の合理的精神が明確に現れていることは注目に値する。そして (6) (7) は、聖仙が間に入って、降下入すべき ātman/jīva を神製の乳糜という形でもたらし、第3条件を欠いた結果不妊であった女性にそれを直接的に摂取させることで懐妊を実現するエピソードとして注目すべきであろう。

(4) 「わたしは、あなたの為に息子を得るべく規定に従って『アタルヴァヴェーダ』に記されている呪文／真言 (mantra) によって成就する、息子を得るための (putriya) 供犠 (īṣṭi) を、為しましょう。」 (R I.15.2 : p.36)

(5) 「[われわれは、] それによって [あなたが] 不妊 (vehat) となれるところのそれをあなたから滅せしめる (nāśayāmasi). [われわれは、] 他ならぬそれを、別の所に、あなたから離れた遠くに置く。」 (Av III.23.1 : p.44)

(6) 「王よ、今日神々を讃じたあなたによって、これが得られました。しかるに、虎の如き王よ。これは神によって作られた乳糜 (pāyasa) です。あなたは、子どもをもたらし (prajā-kara), 無病 (ārogya) を昂進させる [この] 財宝を受けなさい。[そして、あなたは] 相応の妻たちに対して、「[おまえたちは、] 食すべし (asṅita)」と、しかと与えなさい。王よ、あなたは、[あなたが] その為に祭祀を為せる [その] 息子たちを、彼女たちの内に得るでしょう。」 (R I.16.18cd-20 : p.39)

(7) しかるに、それからそれら最高の女性たちは、王からのその最高の乳糜を、それぞれ食した結果、程なくして、火や太陽にも匹敵する光輝を持てる胎児 (garbha) たちを設けました。 (R I.16.31 : p.40)

3. 呪詛と懐胎～『ラグヴァンシャ』より 以上で、聖仙による「贈物と呪詛」と「懐胎と不妊」の基本的なメカニズムはほぼ解明された。実際の物語世

界では、省略的に描かれることが多いせいも、聖仙の不思議力として神秘主義のうちに解消されてしまいがちである。だが、いずれもかなり合理的なメカニズムの下に描かれている点に心すべきであろう。不妊／懐胎と聖仙の関わりが過不足無く十全な形で描かれる具体例として、Rv 冒頭部のエピソードに注目してみた。

不妊に悩む国王夫妻は、聖仙に相談に出向く。それに対して聖仙は(8)のように、王夫妻の不妊の理由を説明し、それへの対応策を助言する。王が昔、敬意をもって接すべき如意牛スラビに対して、「軽視 avajñāna」という無礼(悪事)を働いた結果、スラビの怒りを買って呪詛された。「あなたはわたしを軽視した。だから、あなたはわたしの子孫を宥め、満足させることなしには、子どもを授かることはないだろう」と。「過去の自らの過ちを反省し、謝りにこなければ、śukra と śonita の結合体に、ātman/jīva が降下入するのを妨害するぞ」というものであり、聖仙の助言は、スラビの娘を「宥めよ ārādhaya」というものである。(9)のように、国王夫妻によって努力がなされ、最終的に子宝が授けられるのである。(8)以前、あなたが帝釈天に近侍した後、大地に戻って行こうとした時に、[その]途上、如意樹の蔭に憩う、スラビがいました。<75>ダルマの消失への畏れより、月経(rtu) [後の]沐浴をなせるかの王妃を想いつつ、あなたは、右繞に値するその[スラビ]に、善事を為しませんでした。<76>「[あなたが]わたしを軽視する(avajānāsi)このことの故に、わたしの後裔(prasūti)を宥めることなしに(anārādhya)、あなたに、子ども(prajā)が生じるだろうことはありません」と、その[スラビ]は、あなたを呪詛したのです(śaśāpa)。<77>王よ、その呪詛(sāpa)は、あなたによっても御者によっても、聞かれませんでした。虚空のガンジス川の奔流にあって、驕れる方位象(dig-gaja)が、吼えていたのですから。<78>軽視(avajñāna)の故に、自己のその願望(īpsita)が阻まれてある(sārgala)と[あなたは]知りなさい。なぜならば、供養すべき対象(pūjya)への供養(pūjā)違反(vyatikrama)は、安寧(śreyas)を阻む(pratibadhnāti)のですから。<79>そして、今やその[スラビ]は、長きに亘るソーマ祭に関わる、ヴァルナ神の供物のために、蛇によって閉ざされた門のあるパーターラ[地獄]に、居住しておるのです。<80>その者の娘を、スラビの代用物(pratinidhi)と為して、[あなたは、]妻と共に清らかに宥めなさい。なぜならば、喜べる(prīta)ときに、その[スラビ]は、欲望(kāma)を叶えるのですから。<81>(Rv I.75-81: pp.17-18)

(9) あなたの、師に対する信愛、及び、わたしに対する憐愍によって、[わたしは、]喜んで(prīta)います。息子よ、[あなたは、]贈物(vara)を選ぶべし。[あ

なたは、] わたしを、単なる乳の産出者として知るなかれ、満悦した (prasanna) ならば、欲望 (kāma) を叶えるものと [知るべし.] < 63 > 【中略】それから、天空が、アトリの目より生じた光輝を、[保持する] ように、ガンジス川が、アグニ神によって放たれた、シヴァ神の精液を [保持する] ように、王妃は、世界の守護者 [たる神] の重大な威神力によって満たされた胎児 (garbha) を、王家の繁栄の為に、妊ったのでした。 < 75 > (Rv II.63, 75 : pp.34-36)

むすびにかえて この「呪詛と懐胎」問題は、結局は善業・悪業の因果応報のメカニズムによって説明することが出来るように思われる。ダルマ dharma に適った善業を重ねることで幸せを実現できるとするヒンドゥー教社会の一つの縮図である。夫婦が健康で善良でありさえすれば子供は授かるとの前提がすべての物語の根底に透けて見える。

インド的文脈にあって、聖仙の呪詛 sāpa は、当人が犯した不善 adharmā / 過失 doṣa の当然の報いとして用意されたものである。したがって、呪詛の発効にとっては、呪詛そのものが過失者によって聞かれる必要はない。だが上に見た Rv の (8) (9) は、「呪詛 (呪文) は当の過失者によって聞かれるように」との現実的な配慮のあったことを如実に物語っている。すなわち呪詛を受けた過失者 / 罪人に対して「贖罪の方途」を知らしめるという極めて現実的な意味役割を担っていたのである。古典インドに於ける「呪詛と懐胎」のテーマとは、「自らの某かの不善 / 過失の結果、某かの (怒り→) 呪詛を受けて不妊となっていた者が、その不善 / 過失を十分に贖うことによって、某かの (満悦→) 贈物たる子宝を授かる」というものである。このような理解を得るならば、今回のテーマ「呪詛と懐胎」に限定しても、インド文化の現実主義的な合理主義的傾向が古来きわめて顕著であったと気づかされるに違いない。

〈略号・テキスト・参考文献〉

Av : *Atharvaveda* (Roth & Whitney Ed.) : **Cs** : *Carakasamhitā* (Kashi Skt. S. 228) : **R** : *Rāmāyaṇa* (Nirṇaya Ed.) : **Rv** : *Raghuvamśa* (Nirṇaya Ed.). 森真理子 [2004] : 「garbha 論の為の一考察—古典インド医学文献を中心に—」『印仏研』53-1, [2005] : 「kukṣi と garbha —仏典の記述を中心として—」『駒大大学院仏教学研究會年報』38, [2006] : 「呪詛されたインドラ神の身体を廻って—」『駒大大学院仏教学研究會年報』39.

〈キーワード〉 胎児 garbha, 聖仙 ṛṣi, 呪詛 sāpa, 贈物 vara

(駒澤大学大学院修了)